

指導資料

生徒指導 第77号

鹿児島県総合教育センター
令和2年4月発行

対象 小学校 中学校 義務教育学校
校種 高等学校 特別支援学校



不登校対策は「未然防止」と「初期対応」がカギになる！ — 不登校児童生徒数の減少を目指して —

不登校児童生徒数は増加傾向にあり、早急に解決すべき重要な課題となっている。不登校児童生徒数を減少させるためには、不登校の児童生徒への支援を進める一方で、新たな不登校児童生徒を生まない取組を進める必要がある。そこで、不登校の「未然防止」と「初期対応」の取組について提案する。

1 不登校の現状と対策

(1) 不登校の現状

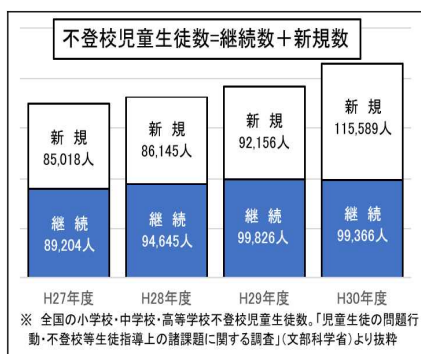


図1 不登校児童生徒数の内訳

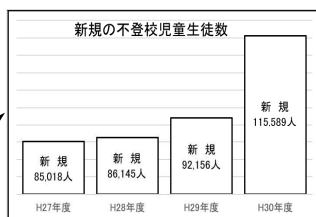


図2 新規不登校児童生徒数の推移

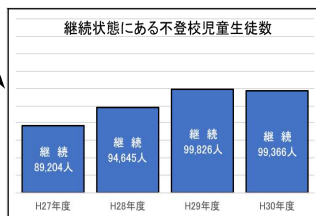


図3 継続不登校児童生徒数の推移

不登校児童生徒数は、増加傾向にあります。不登校児童生徒数を継続（前年度から引き続き不登校であった児童生徒）と新規（当該年度初めて不登校となった児童生徒）に分けて棒グラフに表すと、継続に比べ、新規が大きく増加していることが分かります。

継続している児童生徒への個に応じた支援を継続していく一方で、新規の不登校児童生徒をいかに抑制するかが、喫緊の課題です。



不登校は、どの児童生徒にも起こり得ることです。常に危機意識をもち、児童生徒一人一人に寄り添った支援を実践していくことが、新たな不登校児童生徒を生まないことにつながります。また、「この児童（生徒）は大丈夫だ。」という先入観や固定的な見方で児童生徒と接するのではなく、客観的に自分自身の見方を評価することが大切です。

(2) 不登校対策

表1 不登校対策の効果基準

効果基準	対象	主たる取組	
新規数の抑制	全ての児童生徒	集団支援	→ 未然防止
	兆しの見えた児童生徒	集団支援・個別支援	→ 初期対応
継続数の減少	不登校児童生徒	個別支援	→ 自立支援

不登校対策は、前年度不登校の児童生徒（継続）への支援と、**新たな不登校児童生徒（新規）を生まないための未然防止と初期対応**の取組が重要です（表1）。

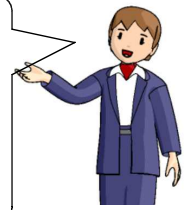


2 新たな不登校児童生徒を生まない取組

(1) 未然防止の取組

取り組むべきことは、**全ての児童生徒**が学校に来ることを楽しいと感じ、学校を休みたいと思わせないような**日々の授業と学校生活の充実**です。

次の「不登校の未然防止を意識した教師の取組チェックリスト」を参考に、**未然防止につながる取組と意識**して、学校全体で日々の取組を実践しましょう。

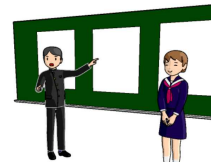


【不登校の未然防止を意識した教師の取組チェックリスト】

○ 分かる授業づくり

児童生徒一人一人の習熟の程度に応じた分かる授業や補充指導を行う。

- 一人一人の実態に対応できるような教材研究をして授業に臨む。
- 児童生徒が主体的に活動する時間を確保する。
- 児童生徒と視線を合わせ、語りかけ寄り添いながら授業をする。



○ 温かな学級づくり

児童生徒一人一人が存在を感じられる学級、いじめや差別のない温かい学級をつくる。

- 児童生徒のよいところを認め、褒める。
- 心が温かくなるような会話や話題の提供、説話をする。
- 「一人一役」の居場所づくりや出番づくりをする。
- 児童生徒同士の絆づくりの場として、特別活動の工夫・充実（児童生徒主体の取組など）を図る。

○ 児童生徒との絆づくり

一人一人の児童生徒と心でつながる取組をする。

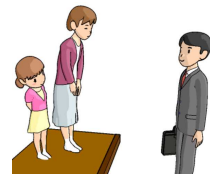
- 毎日全ての児童生徒に温かい言葉を掛ける。
- 日記や連絡ノート等を活用して児童生徒と対話する。
- 「学校楽しいーと」などによる児童生徒の実態を把握するとともに、日々の様子をよく観察し、悩み等に寄り添い、優しく声を掛ける。



○ 家庭との連携及び保護者との信頼関係づくり

家庭との連絡を密にし、児童生徒の努力や成長を共に喜ぶ。

- 児童生徒の小さな頑張りや努力の過程を保護者に伝える。
- 欠席した（している）児童生徒へ連絡（電話、家庭訪問）をする。
- 保護者からの悩みや相談等に、親身になって対応する。



(2) 初期対応の取組



初期対応の基本は、**児童生徒の変化（心のサイン）に気付く**ことです。
次の「児童生徒の変化（心のサイン）のチェックリスト」を参考に、児童生徒の変化（心のサイン）を見逃さず、状況を的確に把握するようにしましょう。

ア 児童生徒の変化（心のサイン）

【不登校の初期対応を意識した児童生徒の変化（心のサイン）チェックリスト】

○ 学校での様子

- 欠席・遅刻・早退が多くなる。
- 休日の翌日や特定の曜日、特定の教科がある日に欠席する。
- 忘れ物が多くなったり、行動が粗雑になったりする。
- 授業中にぼんやりすることが多くなり、学習意欲が低下する。
- 身体の不調を訴え、保健室に行く回数が増える。
- 給食を食べる量が減ったり、残したりする。
- 急に元気がなくなり、表情が暗くなる。
- 友達と遊ばず、一人であることが多くなる。
- 「学校がつまらない。楽しくない。」など訴える。



○ 家庭での様子

- 朝、起きるのが遅くなり、布団から出てこない。
- 朝食を食べようとしない。
- 朝になると頭痛や腹痛を訴える。
- 身支度等に時間がかかり、ぐずぐずする。
- 生活全般で無気力になったり、乱暴になったりする。
- 部屋に閉じこもりがちになる。
- 学校や勉強のことを言うと表情が曇る。



イ チームによる初期対応

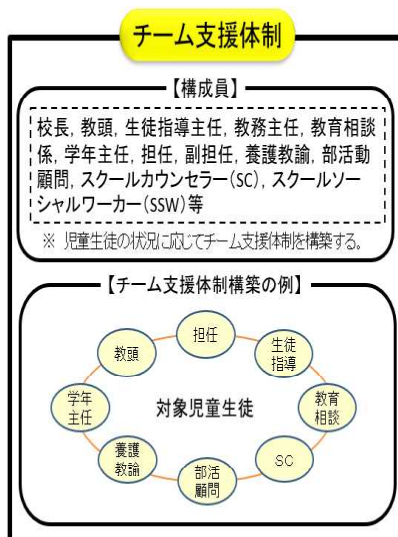


図4 チーム支援体制

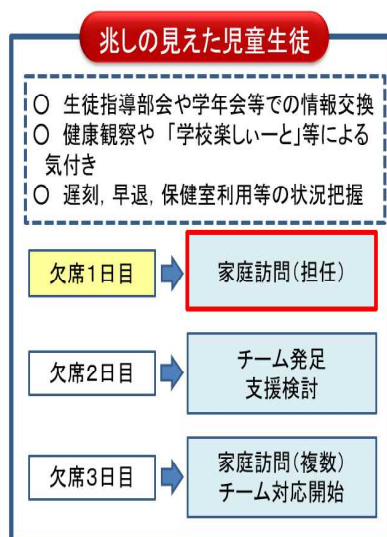


図5 欠席した場合の対応

初期対応の取組は、担任のみで行うのではなく、**早期にチームで対応する体制**（図4）を整え、欠席が続くことを防ぎ、不登校に陥らないようにすることが重要です。

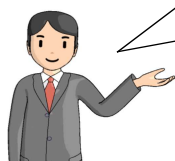
図5のように、**欠席1日目からの初期対応**を必ず行うなど、初期対応の流れをあらかじめ決めておくことで、対応についての共通理解がなされ、時期を逃さず、具体的な対応が可能になります。



3 新たな不登校児童生徒を生まない取組の浸透・継続

(1) 重点目標と共通実践項目の設定

未然防止と初期対応の取組を浸透・継続させるためには、重点目標と共通実践項目を設定し、教職員全員の意識や取組の方向性の共有を図ることが重要です。



【重点目標と共通実践項目の例】

【重点目標】「友達との関係」（「学校楽しいと」における学校適応感6観点の一つ（図6））を高める活動を通して、不登校の未然防止と初期対応を図る。

【共通実践項目】

- ① 「特別活動」における友達同士のつながりを深めるような構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを年間5回実施する。
- ② 「学校楽しいと」を年3回（7月、12月、3月）実施して、「友達との関係」に関する項目の確認と、学級及び児童生徒の状況を把握する。
- ③ 「学校楽しいと」の分析結果等を基に、定例の教育相談を年3回（4月、9月、1月）実施し、「友達との関係」を話題にする。
- ④ 年3回（7月、12月、3月）職員会議後に、「友達との関係」を高める活動を通じた未然防止と初期対応の取組を振り返る時間を設定する。

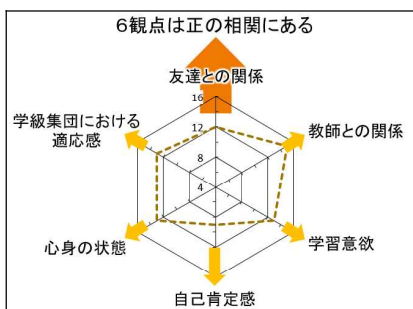


図6 学校適応感6観点

(2) 検証改善サイクル（R-PDCA サイクル）に基づく継続的な支援

重点目標と共通実践項目の設定だけでは、取組を浸透・継続させることはできません。検証改善サイクル（R-PDCA サイクル）を基準に、改善を図りながら進めていくことが大切です（図7）。「学校楽しいと」等の調査結果から「なぜこのような結果なのか、どんな手立てを講じるか。」を教職員全員で分析・検討するようにします。分析・検討の繰り返しによって、共通理解が図られ、実効性の高い取組となります。

「学校楽しいと」等の調査結果や観察に基づいて、教職員全員で児童生徒の背景を探り、取組の点検・見直しをして、継続的に支援することが、より多くの児童生徒に届く取組につながります。

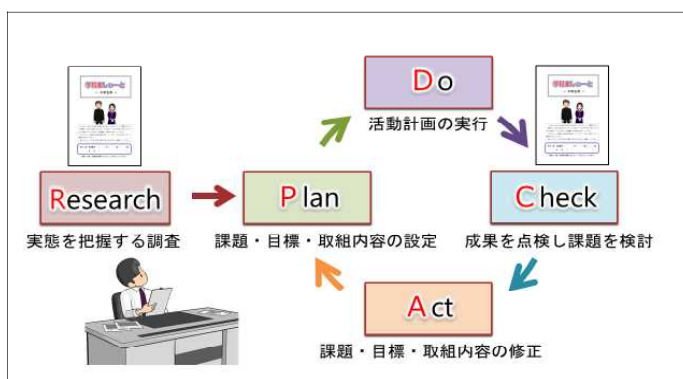


図7 検証改善サイクル



－引用・参考文献－

- 国立教育政策研究所『生徒指導リーフ「不登校の予防」』平成26年4月
- 文部科学省『平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について』令和元年10月
- 鹿児島県総合教育センター『研究紀要第119号』平成27年
- 志布志市教育委員会『魅力ある学校づくり調査研究事業志布志市教職員用リーフレット』平成29年3月

（教育相談課 梶原 淳）



「学校楽しいと」Webサイト



不登校の未然防止・初期対応チェックリスト

1 不登校の未然防止を意識した教師の取組チェックリスト

○ 分かる授業づくり

児童生徒一人一人の習熟の程度に応じた分かる授業や補充指導を行う。

- 一人一人の実態に対応できるような教材研究をして授業に臨む。
- 児童生徒が主体的に活動する時間を確保する。
- 児童生徒と視線を合わせ、語りかけ寄り添いながら授業をする。



○ 温かな学級づくり

児童生徒一人一人が存在を感じられる学級、いじめや差別のない温かい学級をつくる。

- 児童生徒のよいところを認め、褒める。
- 心が温かくなるような会話や話題の提供、説話をする。
- 「一人一役」の居場所づくりや出番づくりをする。
- 児童生徒同士の絆づくりの場として、特別活動の工夫・充実（児童生徒主体の取組など）を図る。

○ 児童生徒との絆づくり

一人一人の児童生徒と心でつながる取組をする。

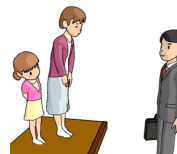
- 毎日全ての児童生徒に温かい言葉を掛ける。
- 日記や連絡ノート等を活用して児童生徒と対話する。
- 「学校楽しいと」などによる児童生徒の実態を把握するとともに、日々の様子をよく観察し、悩み等に寄り添い、優しく声を掛ける。



○ 家庭との連携及び保護者との信頼関係づくり

家庭との連絡を密にし、児童生徒の努力や成長を共に喜ぶ。

- 児童生徒の小さな頑張りや努力の過程を保護者に伝える。
- 欠席した（している）児童生徒へ連絡（電話、家庭訪問）をする。
- 保護者からの悩みや相談等に、親身になって対応する。



2 不登校の初期対応を意識した児童生徒の変化（心のサイン）チェックリスト

○ 学校での様子

- 欠席・遅刻・早退が多くなる。
- 休日の翌日や特定の曜日、特定の教科がある日に欠席する。
- 忘れ物が多くなったり、行動が粗雑になったりする。
- 授業中にぼんやりすることが多くなり、学習意欲が低下する。
- 身体の不調を訴え、保健室に行く回数が増える。
- 給食を食べる量が減ったり、残したりする。
- 急に元気がなくなり、表情が暗くなる。
- 友達と遊ばず、一人でいることが多くなる。
- 「学校がつまらない。楽しくない。」など訴える。



○ 家庭での様子

- 朝、起きるのが遅くなり、布団から出てこない。
- 朝食を食べようとしめない。
- 朝になると頭痛や腹痛を訴える。
- 身支度等に時間がかかり、ぐずぐずする。
- 生活全般で無気力になったり、乱暴になったりする。
- 部屋に閉じこもりがちになる。
- 学校や勉強のことを言うと表情が曇る。



不登校の改善につながる自立支援の取組例

一度不登校になると、改善が難しく、多くの学校で対応に苦慮しています。しかし、改善につながった事例もあり、不登校児童生徒の継続数は、平成28年度をピークに減少傾向が見られます。次の「不登校の改善につながった不登校児童生徒への取組例」を参考に、個に応じた、組織的・継続的な支援に取り組みましょう。



【不登校の改善につながった不登校児童生徒への取組例】

1 本人への対応

- 担任が、「朝、一緒に学校に行こう。」と声を掛けた。
- 不安要素を聞き取り、その解消に努めた。
- 家庭訪問時に一緒に散歩やキャッチボール、ゲームをした。
- 担任や友達が、放課後一緒に学習をするために家庭訪問を続けた。
- 本人が作成した資料を授業で活用し、授業の感想を手紙にして渡すことを続けた。
- 長期休業中に、「学校で勉強しよう。」と誘い、学年部で個別指導を実施した。
- 長期休業中に、学級レクリエーションを行い、長期休業明けに登校しやすいようにした。
- 「まずは部活動だけでも参加してみよう。」と声を掛けた。
- 部活動の友達や先輩から声を掛けてもらった。
- 教室以外の学習の場を準備した。一日のスケジュールを本人に決めさせた。担任、副担任、教科担当、相談担当者が空き時間を利用して、授業や会話をした。
- スクールカウンセラーとの定期的なカウンセリングを続けた。
- 「前日夜に学校の準備をする。」「朝6時に起きる。」「制服を着る。」など、段階的に取り組んでいけるような目標を、本人と保護者、担任で決めた。保護者と担任で見届け、称賛した。
- 友達の協力を得て、メールで学校の情報を伝えてもらったり、直接配布物を届けてもらったりした。
- 本人の状況や統制を考慮して、学級編成を行った。



2 保護者との連携

- 保護者と毎日情報交換（手紙、電話、家庭訪問）をした。
- 保護者と一緒に登校してもらうようにした。
- 生活のリズムを崩さないように、毎日決まった時間に寝ることができる環境づくりを依頼した。
- 一日一回、保護者と一緒に外出する時間を設定するように依頼した。
- 親子で、家庭生活の時間割を作成した。

